

DALS ニューズレター No.15



東京大学

21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

*Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life*

2006年10月10日

## 目次

巻頭エッセイ：物語の喪失

下田 正弘

研究会・シンポジウム報告

バトニツキ準教授講演会報告

市川 裕・丸山 空大

シンポジウム「生活の中の祈り」報告

市川 裕・山本 伸一

ベルナルド・フォール教授講演会報告

末木 文美士・前川 健一

Peter Singer 教授講演研究会報告

一ノ瀬 正樹

ロルフ・ヴェレス教授講演研究会報告

島園 進

今後の予定

ミニ・シンポジウム「聖なるイメージ」予告

小佐野 重利

今後の行事予定

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>



## 物語の喪失

下田 正弘(本研究科教授・インド哲学仏教学)

予想外にきれいな外観に、一瞬、目をうたがった。埃に白んだ空をいただく三階建ての学生寮は、20年近い歳月を経た記憶のなかの映像にひきかえ、ずっと鮮やかな色をしていた。一つには、3月とはいえ傾きかけた強い陽射しに映える、塗り替えられてあまり時が経たない外装と、稀にしか光の当たらない、ほのぐらい意識の底の記憶がつくりだす対照のせいだったのかもしれない。知人の日本大使館員がかつて私を訪れたときに評した「収監所のような」おもむきは、すくなくともそこにはなかった。かぞえきれないほどの日常の堆積に埋もれてしまった特別な過去の日々を再会するため、今回ばかりは数日をかけてもここを訪れたかった。

門を入ると前庭が広がり、その中を5-6メートルほど小路が横ぎって、左手の食堂と右手の宿舎を結ぶ渡り廊下に交差する。懐かしさと果たせなかった夢が実現したよるこびとがないまぜになり、小路をつくる平石を等間隔に踏みしめるのさえもどかしく感じられた。渡り廊下を右に折れ、いよいよ三階の、あの自分の部屋に向かって階段をのぼりはじめたとたん、記憶を押しとどめていた意識の防波堤が消失し、過去が急に浮上して自分に重なった。改修のゆきとどいたほかの場所にたいして階段はまったく昔のままだった。驚いたのは、かつての自分がこうして視線を落とし、ほとんど光が遮られた暗い階段を一段ずつ見つめながら部屋へと向かったことに、いまあらためて気がついたことだった。滑るように過ぎては消える安穩な日々とは異なって、ここの時間は痕跡となって自分のなかに残っていた。

刻まれた傷が自分の証なのかもしれない。当時のインドにはすくなくともひ弱な日本人留学生の目にはあらわとなった生老病死が存在した。死と生が競いあう混沌に立ったとき、生から死へ、あるいは死から生へ、いったい自分がどちらからどちらへ向かうとしているのかさえ不分明になった。無秩序に圧倒され、横溢するエネルギーに吞噬される。あらかじめ想定したいくつかの思考実験は、貧しさ、病、そして死までも日常の喧騒のなかに容赦なくかき消してゆく現実のまえには意味をなさなかった。死と生が円環をなす輪廻は、ここでは観念ではなく、生きられつつある現実におもえた。その一方で自分を立脚させつづけてきた根拠、それはこの地においては効力をもたない、遠く淡い物語でしかなかった。

物語の喪失はときに自己の喪失につながる。だがたとえ物語という身ぐるみを剥ぎ取られても、想念を伴うこのひと尋の身体は、あらゆる物語化に先立つ裸形の事実として、無常なる世界に曝されたまま、なおもこの世界に居つづけなければならない。覆いを奪われた生命の痛々しさに耐えきれず、ひとはたちまちに別の物語を纏おうとするだろう。裸形となったところをことばで覆うその努力は、まるで物質を身に纏っているのちが地上に誕生するかのようになり、本能的で健気ないとなみにも思えてくる。けれどもいかなる物語も無効になりながら、それでもなおこの地上に居つづけなければならないなら、むしろその痛々しさこそが生命の切実なすがたなのであり、自他の向き合いが生まれ出る起源なのだろう。じゅうぶんな痛ましさには、体験が濾過された清浄さがあり、この世ならぬ輝きがある。なにゆえに釈尊は「苦」を第一の真理として説き、それをなぜ高貴なる真理と呼んだのか、ふと、そのことが思われた。

## バトニツキ準教授講演会報告

市川 裕（本研究科教授・宗教学）

丸山 空大（本研究科博士課程1年・宗教学）

去る2006年7月21日、東京大学本郷キャンパスにて、プリンストン大学準教授リオーラ・バトニツキ氏による講演“Levinas’s View of Death and Its Relation to Judaism”がとり行われた。この講演会は、二つの東京大学21世紀COEプログラム、「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」・「共生のための国際哲学交流センター」の共催により行われた。予め日本側で講演の主題を設定し、講演者の了解を得て決定された。講演会では、氏による講演の後、内容の抄訳が読み上げられ、COE「共生の哲学」の責任者である東京大学教授小林康夫氏にコメントをお願いすることができた。また、講演会の終わりには質疑の時間が設けられ、フロアとの間で活発なやりとりが行われた。

講演は、結論を含めた五部から成り、死をめぐるレヴィナスの思索を、存在論・キリスト教との対立軸から分析した後、最後にユダヤ教における死のとりえ方との類似点が探られるという構成をとった。まさに二つのCOEプログラムにふさわしい内容であったといえよう。講演の詳しい内容は以下の通りである。

西洋哲学において死は、自らの存在に区切をしるすものとしてとらえられてきた。これに対しレヴィナスは、主体自身の死ではなく、殺人における死に注目する。彼は、殺人は、殺人が道徳的に不可能であることを示している、と主張した。彼は、カインとアベルのエピソードについて、カインが殺人を実行できたのはアベルの顔を見なかったからだ、という。人間の顔は、殺人において消しさが出来ない。なぜなら、それは物質的な存在であり、かつその彼方でもあるからだ。このような議論を通して、レヴィナスは、死を存在か無かという存在論の問いから遠ざける。

死を存在論の問いとして、即ち存在の無化としてとらえる事は、殺害された人々を無いことにするという意味するだろう。このような観点から描かれる歴史は、生き残ったもののみを肯定し、一つの全体性を構成する。このような意味付与的な歴史(キリスト教的な終末論も含めて)に抗して、レヴィナスはそこからはみ出す「内部性」という次元をきりだす。このような、全体性と歴史の拒絶には、ホロコーストの記憶が関わっている事はいうまでもない。

レヴィナスは、感受性と享受についての分析を通して、主体を、他者にたいする責任のなかで唯一無二なものとして規定される、ほかの何者でもない「私」として描き出した。このような、外部に対して負債を負う、唯一無二の単独な「私」こそが内部性を可能にするのだ。この孤立し



た「私」を、レヴィナスは無神論的な自我と名づけ、倫理の必要条件におく。

このような、倫理に先行する無神論的な自我という発想は、20世紀初頭のユダヤ人神学者フランツ・ローゼンツヴァイクの思想と軌を一にする。ローゼンツヴァイクは、このような無神論的な自我と神との非対称的な応答関係を、啓示として記述したが、レヴィナスはそれを「善」と呼ぶことによって、ローゼンツヴァイクの啓示を倫理的な理論に読み替えたといえることができるだろう。

ところで、レヴィナスの死についての見解がユダヤ教の伝統と強い一致をみる場面として、死に対して、繁殖を強調する点をあげることが出来る。ここでレヴィナスは、キリスト教的なテーマにユダヤ的なひねりを加えつつ、有限な人間存在の間の超越的で倫理的な関係を指して「復活」と呼ぶ。父子関係はレヴィナスにとって、他者に対する唯一無二の責任をあらわす一般的な関係であり、このとき、子孫の繁殖は死を超えて、その関係を未来へとつなげてゆく。この意味で、未来の世代の繁殖は、人間存在の最も高度な道徳的召命であるといえよう。他方、ユダヤ教の伝統においても出産と家族は、宗教生活において死よりも重要な要素である。レヴィナス、そして広くとらえたユダヤ教にとって、死は人間の実存の価値や欠如を決定するものではなく、むしろこの人生における人間の正しく責任ある位置を確認するものだといえるのではないか。(執筆：丸山空大)

## シンポジウム「生活の中の祈り」報告

市川 裕（本研究科教授・宗教学）

山本 伸一（本研究科博士課程1年・宗教学）

シンポジウム「生活の中の祈り：一神教における神との交わりの諸相」は、ユダヤ教だけではなく、キリスト教やイスラームの視点も交えつつ、祈りを通してそれぞれの宗教の類似と相違を発見することを目的としておこなわれた。個々の発表者は、画像や音楽を用いながら、とりわけ「文字と音」を通してそれぞれの宗教の祈りのあり方に迫った。冒頭においては、まず市川裕氏（文学部・人文社会系研究科教授）からシンポジウムの趣旨が説明され、ユダヤ教の「シェマアの祈り」を例に挙げて続く議論の全体的な方向付けがなされた。



嶋田英晴氏（人文社会系研究科博士課程）は「シナゴグにおける礼拝について」という題目で、シナゴグの構造や装飾から、そのなかで実際に行われる礼拝と聖歌についての発表を行った。シナゴグの内部構造や定期的な礼拝といった形態上の側面は、伝統的にある程度の共通性を保ち続けてきたが、その一方で聖歌については、つねに周辺の文化的な様式や趣向から多くの影響を受け続けてきた。ユダヤ教はトーラーやシナゴグという伝統に忠実でありながらも、音楽や装飾に対しては積極的に柔軟な姿勢を示した。これはおよそ2000年の間異教徒の社会で生きてきたユダヤ人の偉大な特長であると言える。

山本伸一（人文社会系研究科博士課程）は「生活の中の魔除けとその機能」という題目で、ユダヤ教文化の比較的注目されにくい側面に光を当てることにより、ひとつの興味深い祈りの形態を紹介した。ユダヤ教文化において、魔除けは生活の中の重要な要素であり続けてきた。その特徴はヘブライ文字で神や天使の名が記されていることであり、その文字の力によってこそ魔除けに効力があると考えられることさえある。こうした魔除けは現代のユダヤ人の生活にも、テフィリン（祈りの際に身に着ける聖句箱）やメズザー（ケースに収め戸口に設えられる聖句の紙片）

といった形で残存しており、シナゴーグや家庭で行われる制度的な祈りとは異なる様相を示している。

ヘルマン・ゴチェフスキ氏（総合文化研究科助教授）は「地よ、聞け、わたしの語る言葉を：聖書の言葉とその響き」という題目で、アウグスティヌスが『告白』のなかで示した音楽についての見解を紹介し、さらに旧約聖書の歌と音楽に関係する箇所と比較分析的な視点から論及した。アウグスティヌスによれば、教会音楽は敬虔な心情を掻き立てるものであるが、それに耽溺し快感を覚えるのなら罰を受けるに値するものでもある。また、旧約聖書に現れる音楽は、歓びの歌として描き出されることが多いが、時として人間の頹廃を表象することもある。これらの時代を超えた事例には、普遍的に見られる信仰心と音楽の密接な関係が過度に進むことで、そこにある種の信仰の危険が潜んでいることが暗示されている。

杉田英明氏（総合文化研究科教授）は「イスラームのかたち：『コーラン』の響きと文字装飾」という題目で、『コーラン』の様々な朗読形式の解説から出発し、「光の聖句」（第24章「光」35節）と装飾美術の関係性についての示唆的な議論を展開した。メッカの方角を示すモスクのミフラーブ（壁龕）はしばしばデザインのなかにランプの表象を含み、建築装飾やランプには実際に「光の聖句」が書かれることさえある。このように光にまつわるものが祈りの場と密接に結び付いており、それが中世のイスラーム哲学や民間信仰の領域からも見て取れることが指摘された。



以上のような発表の後で、聴講者を交えて活発な意見交換が行われた。普段はなかなか触れる機会の少ないユダヤ教文化についての紹介を試みた特別展「聖書に生きる：トーラーの成立からユダヤ教へ」の関連企画にふさわしく、展示内容に関連付けられた発表や議論が行われたばかりでなく、祈りという切り口で領域横断的なシンポジウムが催されたことは、一神教の宗教文化を理解する上で極めて重要な意義を持つものである。（執筆：山本伸一）

## ベルナルド・フォール教授講演会報告

末木 文美士（本研究科教授・仏教学）

前川 健一（本 COE 特任研究員・仏教学）

本ニューズレター前号でもお知らせしたように、総合文化研究科の COE「共生のための国際哲学交流センター」（UTCP）ではベルナルド・フォール教授（コロンビア大学）を招聘したが、本 COE「死生学の構築」（DALs）でも UTCP と共同で講演会を開催した。フォール教授は、禅宗史研究から出発し、ポストモダンの方法論やセクシュアリティ・象徴解釈といった観点を導入して、仏教史の見直しを行っている。近年の著作には、*Power of Denial: Buddhism, Purity, & Gender*(2003)、*Visions of Power: Imaging Medieval Japanese Buddhism*(2000) などがある。



駒場キャンパスでは、UTCP 主催で以下のとおり連続講演会が行われた。

- 5月16日(火) 18:00-19:30 Buddhism between Mythology and Philosophy  
( 仏教：神話学と哲学のはざまで )
- 5月22日(月) 13:00-14:30 From Spinoza to Zenchiku: The Avatars of Pantheism  
( スピノザから禅竹へ：汎神論の変容 )
- 5月22日(月) 14:40-16:10 The Beauty of Polytheism  
( 多神教の美 )
- 5月29日(月) 18:00-19:30 In Praise of Gradualism  
( 漸悟を讃えて )

一方、本郷キャンパスでは、6月12日(月)17:00-19:00、“The Jewel and the Sword: Symbols of Life and Death in Medieval Japan” (宝珠と宝剣：中世日本における生死の象徴)と題してDALSC・UTCP 共催の講演会が行われた。本講演で、フォール教授は、愛染明王・不動明王それぞれを象徴する宝珠・宝剣に注目し、特に宝珠が仏舎利や他の尊格など様々な象徴と結びつく複雑な象徴体系の一部であることを示された。そのような象徴体系の一部として、生死の問題に密接に関連する閻魔天の表象や性・生殖などの問題にも論及し、宝珠と宝剣のような対立する原理とそれらを統合・包摂するものという三つ組のパターンが中世的思考の根底にあると結論づけられた。その後のディスカッションでは、テキスト解釈をめぐる専門的問題のほか、フォール教授の提示した中世的象徴体系の解釈や位置づけをめぐる活発な議論が行われた。講演には、UTCP 側から石黒ひで特任教授、小林康夫教授、門脇俊介教授などが参加し、DALSC との交流を果たした。



## Peter Singer 教授講演研究会報告

一ノ瀬 正樹(本研究科助教授・哲学)

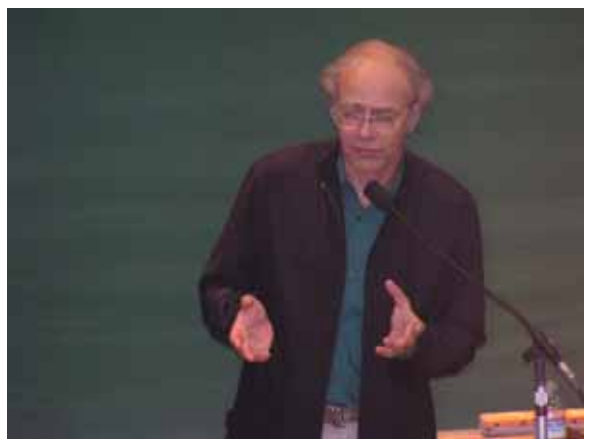
去る2006年6月15日木曜日、東京大学文学部一番大教室において午後5時より、生命倫理研究および動物解放論によって世界的に著名なピーター・シンガー教授の講演研究会がCOE主催そして哲学会共催で開催された。平日にもかかわらず会場に250人以上の方々が集まり、立ち見も出るという盛況であった。シンガー教授はオーストラリア出身で、メルボルン大学や英国オックスフォード大学に学び、オーストラリアのモナッシュ大学教授を経て、現在は米国プリンストン大学に生命倫理学の教授として在籍している。ベジタリアニズムの実践などという点で人々の実際の生活に直接大きな影響を与えている、現代の哲学者としては稀有な存在である。今回たまたま来日を果たすということで、シンガー氏の友人である山内友三郎教授そして本学医学部助手の児玉聡氏の仲介によって、東京大学本郷キャンパスにおける講演研究会が実現の運びとなったのである。司会を務めた筆者自身、応用倫理教育プログラムにおいてシンガー氏の議論にしばしば言及し、実際本年度は「動物の権利」をテーマとした演習をしていたこともあり、直接ご本人から話が聞けるということで大いに楽しみにしていた講演研究会であった。

今回のシンガー氏の話は、「生死の意思決定に関して倫理学を変えること」(Changing Ethics in Life and Death Decision Making)と題された、おもに生命倫理に関わるものであり、脳死、重い障害を負った新生児の扱い、安楽死・医師による自殺幫助といったトピックが取り上げられた。とはいえ、議論の途中で、動物の道徳的地位との類比的観点がいくどか持ち出され、シンガー氏のもう一つの主題である動物解放論との連携性も感じさせる講演内容であった。議論の要点は、シンガー氏の主張を知っている人ならばほとんどおなじみのものであり、今回の講演はシンガー氏の



これまでの倫理的主張をわかりやすく集約したものであったといえる。まず、脳死の問題をめくって、「ハーヴァード委員会」が「回復不能な昏睡」あるいは脳死を「ひとの死」と定義したことを振り返り、それは決して自然科学的根拠に基づく死の定義の変更なのではなく、臓器移植と「生命の神聖性」との整合性を考慮した倫理の変更なのだとする。その上で、氏は、それが倫理の変更ならば、伝統的な死の定義を維持し、脳死は「人の死」ではないとしつつ、むしろ「生命の神聖性」という規範を変えて、脳死の人からの臓器移植を認める、という別の倫理の変更もあるはずだと論じた。実際、脳死の人でも呼吸をして心臓が動いている以上、脳死を死としないという論点は直観に訴えるところがあるし、しかし同時に脳死の人が「意識」の機能を失いもはや人間的な生を送れない状態になってしまっているという点も動かしがたい以上、氏の主張には重いリアリティがあることは確かである。いかなる生命も神聖であるという道徳規範を変更してみようという、このシンガー氏の提言は、重い障害を負った新生児の扱いや、安楽死・医師による自殺幫助の問題にも一定の道筋を与える。重い障害を負った新生児については、本人の将来や家族の負担などを考慮する限り、そしていまだ「意識」が完全に成立していない限り、さらには養育に責任を負うべき両親が同意したときに限り、その命を終止させたとしても倫理的に絶対の悪とはいえない。同様に、末期の患者が自らの死を選んだり、医師に自殺幫助を願い出たりすることは、命は尊いものだから決して許されないというのではなく、当人に十分な判断力があるときには倫理的に受け入れてよいのだ、というのがシンガー氏の診断である。

以上のようなシンガー氏の議論は功利主義の立場からなされており、しかもそれを極限まで首尾一貫することによって結果的に「ひとを殺すこと」を一部容認するという一見過激な倫理的主張に至っている。前もって知ってはいてもやはりショッキングであり、質疑の時間も一種異様な雰囲気の中かで討論が行われた。筆者自身、せっかくの機会なので、司会の特権を利用して早々と質問した。すなわち、シンガー氏のいう倫理の変更は人権思想とどういう連関にあるのか、人権思想の一部を単に改訂するという程度のことなのか、しかし人を殺してはならないという「生命の神聖性」が人権思想の核心だとすると、シンガー氏の主張は人権思想の廃棄に結びつくのではないか。こうした質問に対して、氏は、理論的考察と実践的考察とを注意深く分けてゆくべきだと



以上のようなシンガー氏の議論は功利主義の立場からなされており、しかもそれを極限まで首尾一貫することによって結果的に「ひとを殺すこと」を一部容認するという一見過激な倫理的主張に至っている。前もって知ってはいてもやはりショッキングであり、質疑の時間も一種異様な雰囲気の中かで討論が行われた。筆者自身、せっかくの機会なので、司会の特権を利用して早々と質問した。すなわち、シンガー氏のいう倫理の変更は人権思想とどういう連関にあるのか、人権思想の一部を単に改訂するという程度のことなのか、しかし人を殺してはならないという「生命の神聖性」が人権思想の核心だとすると、シンガー氏の主張は人権思想の廃棄に結びつくのではないか。こうした質問に対して、氏は、理論的考察と実践的考察とを注意深く分けてゆくべきだと

いう点、さらには動物の権利も射程に入れた議論なので人権概念に限った主張ではないという点などに言及して答えてくれた。筆者としては満足はできなかったが、長年の疑問を本人にぶつけることができたことは幸いだった。それ以外に、人間と動物を差別する「種差別」をシンガー氏は糾弾しているが、氏の議論もまた「意識」のある存在とそうでない存在を差別するいわば「意識差別」にならないか、という興味深い質問もフロアから出た。シンガー氏はやはり、原理的な問題とは別に、実践的感覚に基づくことの重要性を強調した。充実した討論の後、「フォレスト本郷」にて懇親会が催され、高橋和久文学部長に歓迎のご挨拶をしていただいた。ベジタリアンであるシンガー氏夫妻のための料理も準備され、そうした食材のことをも話題としながら、多くの人がシンガー氏と話す機会を得て、熱のこもった議論が懇親会中も続けられた。「死生学」プロジェクトにとって、かなり重大かつ有意義な夜となったことを心底確信した瞬間であった。

## ロルフ・ヴェレス教授講演研究会「希望への超越」報告

島園 進（本COE拠点リーダー・宗教学）

2006年8月29日(火) 15時から17時まで、法文1号館315教室において、ハイデルベルク大学教授、ロルフ・ヴェレス教授による講演「希望への超越　ドイツにおけるスピリチュアルケアの現状」が行われた。ヴェレス教授は医師であり臨床心理士であるとともに、作曲やピアノ演奏やカメラ作品で知られる芸術家でもある。

多くの末期がん患者のカウンセリングを行い、病院が死に行く患者のケアの体制をどのように整えていくかについて考察し、実践して来たヴェレス教授は、その経験に基づき、印象深く現代医療が必要としているスピリチュアルケアについて語った。

患者は確かに少しでも長く生きることを望んでいるかもしれない。しかし、それは患者の唯一の希望であるわけではない。苦痛に苛まれ続けるのではなく尊厳ある死を迎えること、自らの人生を振り返り交わりをもった他者たちに思いをいたすこと、死に向き合ってきた人類のさまざまな試みに学ぶことなども希望の一部である。そうした希望には自己自身を超えていく超越への願いでもあり、スピリチュアリティの次元に関わる。

ところが現代医学はそのような次元に対して心を閉ざしがちだ。病院や医師は「病氣と闘う」というエートスに染められてきた。医師や科学者は少しでも強く生産的なものを求めるファイティングスピリットを身につけ、そのことによって高い地位を得てきた。しかし、患者が求めているものは病氣と闘ってそれに打ち勝つということだけではない。静かさ、沈黙、耳を傾けることこそが求められている場合もある。

このことはホスピスでもっともよく見えてくることだが、ふつうの病院や医療機関にもあてはまることだろう。スピリチュアリティの次元まで含めて、病院は人間らしい経験が保てる場所に変えていく必要がある。病院とは苦しむ者をいたわるシェルターだが、それにふさわしい施設にするにはどうすればよいのか。

スタッフにこの問題を自覚してもらうために、ヴェレス教授はさまざまな試みを行っている。たとえば、死に行く患者に対する医師の対応をビデオにとって後で討議する。また、俳優に患者





を演じてもらい医師等のスタッフの対応の仕方にフィードバックをする。ふだん患者は医師のふるまいに対する不満を語ることがないが、はっきり言ってくれるとするとどうなるかを演じてみるのだ。あるいは、病院内のさまざまな立場の人たちが他の立場の人たちに対してどのような意見をもっているかをいってもらって、伝え合う。

ヴェレス教授は主体と客体とを分ける科学の態度を超えて、「共鳴」(resonance)が必要であるとする。意味を見出していくには他者が共鳴板とすることが役立つ。ヴェレス教授にとっては、ヴィクトール・フランクルがそのような共鳴板となった。医師もそのような役割を果たしうるかもしれない。それは単にカウンセリングの小部屋のみで行われるものではなく、患者がいるあらゆる場で行われうる。スタッフらはそれぞれに専門家であるかもしれないが、人生については患者個々人が専門家だという認識がなくてはならない。

ヴェレス教授が行ってきたカウンセリングやスピリチュアリティケアのあり方を伝えるために、最後に「千の風になって」という詩が朗読され、ヴェレス教授自身の作曲、また即興によるピアノ演奏が行われた。「私のお墓の前で / 泣かないでください……千の風になってあの大きな空を吹きわたっています / 秋には光になって / 畑にふりそそぐ / 冬にはダイヤのように / きらめく雪になる」(新井満訳)。



## ミニ・シンポジウム

### 「聖なるイメージ 死後の世界とのコミュニケーションの手段として」予告

小佐野 重利 (本研究科教授・美術史学)

2003年3月に本21世紀COE「死生学の構築」プログラム(DALS)がフィレンツェで開催した「洋の東西の美術と思想にみられる死後の世界観 Visioni dell'Aldilà in Oriente e Occidente: arte e pensiero」(同名のイタリア語版報告書は2003年11月刊行)以後、本COEプログラム第二部会「生と死の形象と死生観」は、2004年に2つ、考古学関連のシンポジウム、関東大震災と記録映画に関するシンポジウムを開いただけで、2年余り公開研究集会を行っていない。

フィレンツェのシンポジウムを聴講された、当時トリアー大学美術史学研究所教授で、フィレンツェのドイツ美術史研究所所長のポストに就く予定であったゲアハルト・ヴォルフ教授との口約束 今度は、日本、ドイツ、イタリア三国の研究者で同種のテーマについて論じ合おうではないか を、一部修正して、経費のこともありイタリア人抜きで開催する予定であるのが、今回のミニ・シンポジウムである。本研究科美術史学研究室との共催で行なう。

仮テーマは上記のように決ったものの、イタリア美術史界で由緒のある研究所の所長となって忙しいヴォルフ教授との交信が思うように進まず、彼の発表タイトルは決っていない。同教授には主著に、*Salus populi romani : die Geschichte römischer Kultbilder im Mittelalter*, Weinheim 1990; *Schleier und Spiegel: Tradition des Christusbildes und die Bildkonzepte der Renaissance*, München 2002があるが、死と生の境 死後の世界とのコミュニケーションを取ることのできる一種の「窓口」 に位置する聖画像や聖遺物、人間の手によるものでない聖画像(アケイロポイエータ)であるイエス像や聖顔布(スタリウムやマンデュリオン)について、その起源、伝播、儀式的利

用、変成、中近世のイタリアおよび地中海世界における受容など多様な側面からのアプローチを行なっている。その研究成果の一端を発表してもらおうことになる。

近年、日本・東洋美術史の研究においても、とりわけ仏教美術の研究分野を中心に視覚イメージの本来の機能や宗教儀式的な文脈での位置付けなどが個別に探究されている。

日本側発表者の奥健夫氏（文化庁文化財調査官）は、これまであまり真剣には学問的考察対象にされることのなかった仏像の体内納入品（髪、爪、人骨など）の意義および機能や裸形着装像などの事例を探り、括目すべき成果を挙げている。

奥氏には、仏像の体内への髪、爪、人骨の奉納という現象や、特定人物の等身の大きさをした仏像・肖像の造像という現象について具体的事例に基づき、持論を展開してもらい、キリスト教における類似事例との比較の土台を提供してもらおう予定である。

なお、近年聖遺物の研究にも手を染めている秋山聰（本研究科助教授）にコメンテーターとして、西洋における聖遺物崇敬の役割等の予備知識をまず提供していただきながら、ヴォルフおよび奥両氏の発表にコメントを加えてもらう。その上で、第二部ディスカッションにおいて、隣接諸分野の研究者を交えて、「死後の世界とのコミュニケーションの一手段」であった聖像、聖画像および聖遺物の東西相互比較を試みたいと考えている。

#### <プログラム概要>

##### ミニ・シンポジウム

「聖なるイメージ 死後の世界とのコミュニケーションの一手段として」

日時 2006年12月16日（土） 13:30 17:00

場所 東京大学（本郷キャンパス）法文2号館一大教室

##### 第一部 講演

###### 発表者

ゲアハルト・ヴォルフ教授（ドイツ美術史研究所、フィレンツェ）

同時通訳もしくは逐語通訳付き

奥健夫氏（文化庁文化財調査官）

###### コメンテーター

秋山聰助教授（東京大学人文社会系研究科）

##### 第二部 ディスカッション

## 今後の行事予定

### 公開シンポジウム「死の臨床を支えるもの」

（本COE「死生学の構築」・応用倫理教育プログラム共催）

（担当・竹内整一）

日時 2006年12月2日（土）午後2時～5時

場所 医学部鉄門講堂

##### パネリスト

芹沢俊介（評論家）

田口ランディ（作家）  
大井玄（終末期医療 東京大学医学部名誉教授）  
島蘭進（宗教学 東京大学文学部教授）

司会

竹内整一（倫理学 東京大学文学部教授）

## シンポジウム「精神医療と触法行為の死生学 - 殺人行為をめぐって - 」

（担当・一ノ瀬正樹）

日時 2006年12月9日（土）午前11時より

場所 東京大学文学部一番大教室

特別講演者

Professor Jill Peay (Mental Health Law, London School of Economics)

シンポジウム・パネリスト

作田明（精神医学）

八尋光秀（弁護士）

長谷川眞理子（生物学）

一ノ瀬正樹（哲学）

コメンテータ

小田晋（精神病理学）

コメンテータ兼司会

加藤尚武（哲学、応用倫理学）

### 加藤尚武教授 死生学特別講義

本 COE プログラムの特任教授である加藤尚武先生による、下記のような主題の講演が、二回にわたって行われる。開催日時・場所は未定である。

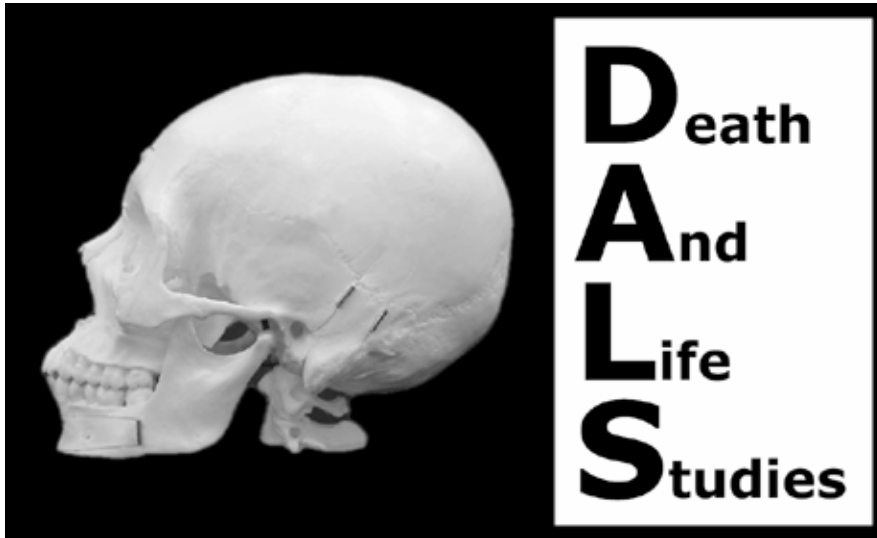
記

第一回、生命の全体像

（生命科学の歴史と生命についての思想史とはどのように関連しあってきたのか）

第二回、生と死・法と倫理

（安楽死、人工妊娠中絶、脳死者からの臓器移植、重度障害新生児の安楽死など、法と倫理と宗教の役割分担をどう理解したらいいのか）



「DALIS ニュースレター」

第15号

平成18年10月10日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

21世紀COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”

責任者 島藺 進

TEL & FAX 03-5841-3736